

ふるさと風

第75号 (2012年8月)

風に吹かれて (53)

白井啓治

『猛暑三日も過ぎると慣れを覚えて』

連日35℃を超す猛暑である。暑くて何もする気がなくなってしまうと思いきや、三、四日が過ぎると体が暑さに慣れてきて、猛烈な汗はかくが普段の生活が戻って来る。

人間というか、生物というものの環境の変化に対して驚くほど俊敏に対応するようである。私自身のこの猛暑に対する無意識な身体の慣れを見ても実に感心してしまう。

地球上に生命体と呼べるものが誕生したのはおよそ40億年前の事という。いろいろ枝分かれをしながらも現在に生きている生物たちは、最も環境適応力、環境対応力の高いもの達である。そのことから考えると、猛暑も三、四日するともう体がそれに対応し、熱さに順応してくるのも不思議ではない。生命力というものはそういうものなのだろう。自然界の摂理から言えば現在の環境に対応できないものは、今の世に生きる資格のないものと言えぬ。残酷に聞こえるだろうが、生きる、生きのびるということはそういうことなのである。

環境の変化に対する適応能力の高低、強弱によって生物の栄枯盛衰があるように、人間の社会に

おいても同じことが言える。現状に対しての適応能力のない社会は滅びていくしかないのだ。

先月号に石岡の伝説話について「もう伝承の力を失ってしまった話ばかりで脚本にするのは難しい」と書いたのであるが、奇しくもそれを証明する様な話しが起こった。

街角情報センターで子供達が、民話をもとにした怪談話をジオラマのようなもので表現するイベントがあり(もう終わったかも)その怪談話として城中山の鈴が池(現在はもうない)の鈴姫伝説を取り上げることになったのだそうだ。それで打田兄の所へ子供達が話の内容を聞きに行ったのだそうだ。

こういうことは子供達が自主的にとは言いながら大人たちが伝承話の存在意義などの話しをしてあげる事が必要なのであるが、どうやらそれもなくテレビ取材用に打田兄が鈴が池の話をしていくシーンを強いられたのだそうだ。

後日、打田兄は気になったので子供達の製作の様子を見に行ってきたのであったが、製作中のジオラマには伝承話としての意義の部分はなく、話しの筋だけが独り歩きしたものであったと言う。子供達にとっては、民話という伝承話の存在意義を知るに絶好のチャンスであったはずなのであるが、伝承話そのものが単なる昔話になってし

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと風の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平 ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

まっているので、伝承力が復活する力も芽もなくなってしまっている様である。
少し古い例えの表現であろうが、教育ママと称する人たちが中身も分らず寡聞気だけで「万葉集はいいわよね」と言うに似て、「民話って大事よね」と言っているような声が聞こえてくるような気がするのは歳のせいだ空耳が聞こえるのかな。因みに、以前にも書いたと思うが、日本語としては未熟な「万葉集」よりも「古今集」「新古今集」の方が文学文芸的には高いと言える。

ちよつと皮肉が過ぎたかもしれないが、真実。

猿・猿田 サルタ⇌葦原**語源** 湿地関係地名の一つにサルがある。北茨城

市華川町花園の小字猿ヶ城は【sar:葦原・湿原・沼地】ノ【sari:地・大地・土地・所】で、今も健在。同市磯原町木皿は【is:茅・荻】【sar:湿原】の語尾追加母音化、kisara である。木皿川(大北川支流)下流の同市中・南部に位置する農村地域である。猿田は各地の大字・小字名に見えるが、その語源を字義どおりに理解することには無理がある。となれば、それは、アイヌ語【sar:葦原、湿原、沼地、泥炭地、やぶ、しげみ】【ta:そのところ】⇌追加開音節化、saruta サルタ ということではなかるうか。右のように、サルはさまざまな意味を持つので、地名の猿田もそれぞれの土地柄に応じた意味を持つ。なかでも、縄文系在住民、渡来系支配層ともども関心が高かったのが、葦原であった。雨水は川と成って台地を解析し、下方へ土砂石を押し流す。勾配が緩やかになるにつれて、流れは滞留し沼となり、土砂等が堆積して湿原が形成され、葦原となる。「天より降り来し神、み名は普都大神(ふつのおほかみ)と称(まを)す。葦原の中津の国に巡り行(い)でまして、山河(やまかは)の荒梗(あらぶるかみ)の類(たぐひ)を和平(やは)したまひき。」(常陸国風土記 信太郡)。「葦原の鹿は、一・二つの国(常陸と下総となり)の大獵(おほかり・大勢の狩人)も、絶え尽くすべくもなし。」(同)。「郡(こほり・郡役所)より西の谷の葦原を截(きり)はらひ、墾闢(ひら)きて新に田に治(は)りき。此の時、夜刀の神、相群れ引率(ひきあ)て、一・一 耕佃(たつく)らしむることなし。」

(同行方郡)。葦原には「絶え尽くすべくも」ない鹿や、大型鳥、「うまし葦牙」(書紀)など。近くの水辺には魚や水鳥、カワウソ、など、縄文系の宝庫であった。しかし、そこは水田稲作の適地でもあったため、渡来系が領有を計り、侵攻した。神話での天孫降臨がその典型であるが、そのとき出迎えた男は、「上は高天の原を光(てる)し、下は葦原中国を光す神」「僕(あ)は国つ神、名は猿田毘古(ひこ)神ぞ」(古事記)と名乗る。「国つ神」は縄文系在住民の神、「猿田」は従来の諸説では名義未詳ということであるが、アイヌ語では葦原であり、毘古(彦)が着いて葦原男という意味であった。猿田は天孫降臨にまで遡る。出雲の国つ神、大國主命も別名は葦原醜男命(あしはらしをのみこと)であった。また、サルは意味が広がり、山中の湿地や沼地を指す地名にも使われた。

所在 鹿嶋市・桜川市の大字名に猿田。小字では、

城里町旧七会村に猿田2、猿田〇〇7、常陸大宮市に猿田が2、猿田入・サル久保・東サル久保・猿内が各1。笠間市大橋・片庭、城里町上赤沢・下赤沢に猿田。常陸太田市田渡の猿田はサンダ。石岡市旧八郷地区にサルタ3。行方市蔵川に猿山・申山(サルヤマ)、岡に申山・申山上、永山に猿内、堀之内に申越、山田に猿谷(サルヤツ)。筑西市旧開城町に申田4・申内1、つくば市谷田部に申田、同市北太田に猿内。大子町の研究家菊池国夫氏によれば、同町に6カ所ある猿田はいずれも山中にあり、サルはザレ(崩れ、地すべり)の転かもしれないとのこと。水戸市旧内原町に於申(オサル)原、行方市旧北浦村に御申発句(オサルホツク)。このオサルはお猿ではなく、【o川尻】【sar:湿原・沼地】かと思われ、発句は崖であるが、現在の地形から

想定することは難しい。

転音 saruta→saruta/sarke→saruki**猿島** サシマ⇌サルシマ⇌葦原地**所在・語源** 『万葉集 防人歌』に「猿島郡」、『和名抄』の下総国の郡名に「猿嶋 佐之万(サシマ)」。『猿

』は「猿」の正字とともに訓読みはサルであるが、今でも猿島がサシマであるように、当ても猿嶋をサシマと読ませている。シカシマに鹿嶋を当てカシマと読んだように、サルシマに猿嶋を当てサシマと読んだのであろうか。そうであれば、語源を解く鍵はサシマや猿嶋ではなく、サルシマにあることになる。もちろん、猿の住む島もありえないことではない。しかし、上記の猿田が猿の田んぼではないことを受けて、以下のように推論した。アイヌ語に【sar:葦原、湿原、沼地、泥炭地、やぶ、しげみ】。その語尾追加母音化、saruta サル。【suma 石・岩】。沖縄でスマは島。シマは静岡海面に出ている岩、千葉安房 波に出没する岩礁、三重南牟婁 暗礁。スマは岩から島に意味が拡大し、その島には始原の意味の岩が含まれていた。シマはさらに、いわゆる島ばかりではなく、陸地内の一定の範囲を指すに至る。縄文海退以後の猿島郡には沼地や低湿地が広がっていた。そのなかのところどころに、少し隆起して葦が茂っているところがある。そのような土地を猿島と言ったのではなかるうか。右の『和名抄』の下総国猿島郡の郷名に「葦津」があることもその傍証になろう。猿島町は合併により坂東市となったが、猿島郡は健在である。

転音 sarusuma→sarusima

古渡・小野・乙戸

フット・オノ・オット

所在・語源

霞ヶ浦に続く小野川川口の両岸に、それぞれ江戸崎町大字古渡(ラット)と桜川村大字古渡・柏木古渡があったが、このたびの合併で稲敷市大字古渡・柏木古渡となった。その古渡はまぎれもなくアイヌ語の【putu(川・沼などの)口】であろう。その小野川は、川口(川尻)が細い入江になっていて、先端両側には堂崎鼻と稲荷ノ鼻という岬が突き出ている。小野川は、【○尻 川尻】

【not あい、みやくき】の語尾消去母音化、onot オノの川ということであろう。それはこの小野についての語源であって、この語源が北茨城市・常陸大宮市・常陸太田市・土浦市・稲敷市(旧新利根村)などの、すべての小野にあてはまるわけではない。また、小野川は、川口にいたる手前大きく沼状に広がり、上流には乙戸川が合流していた。その乙戸川は【○川尻】【○沼】、川尻が沼になっている川ということである。

志筑

シツクⅡ肘

所在・語源

かすみがうら市の旧千代田村の恋瀬川右岸沿いに上志筑・中志筑・下志筑の大字が並んでいる。「郡(こほり・郡役所。在石岡)より西南のた、近く河間(かはあり。信筑(しつくの川と謂(い)ふ。源は筑波の山より出(で)、高浜の海に入る。)

(常陸国風土記 茨城郡)。「筑波ねに登りて見れば、尾花散る師付(しつく)の田居に雁がねも寒く来鳴きぬ。新治の鳥羽(とば)の淡海(あふみ)も秋風に白

浪立ちぬ、」(万葉集とある。これらの師付が今の志筑であることには異論がないが、その語源はなにか。恋瀬川は中志筑に来て、稲荷山と呼ばれる出崎台地に突き当たり、あたかも肘を曲げるようにそれを迂回する。そこは、アイヌ語の、【sitoku 肘、(川や道の)曲がり角】である。その○uがシツク。「師付の田居」は、その地先の筑波山を見渡せる水田一帯を指したものとされる。中志筑の小字に雁郡(がんぐん)・鳥羽海(とばみ)があるのはその万葉集への戯れか。

志戸崎・大志戸

シトⅡ大峰・大湖

所在・語源

かすみがうら市大字坂の湖岸に小字志戸崎がある。霞ヶ浦に南面し、漁港のあるところで、アイヌ語で、【situ(沢と沢とに挟まれた)山の走り根。(本山から幾つも分かれている)支山Ⅱs. 大きな、親の-pu 峰】【sa 浜、前】【ke ところ】の u-o、e-i、シトサキと解読できる。また、同地は、出島半島先端の、霞ヶ浦を高浜入りと土浦入りに大きく振り分ける位置にあり、大きな入海、土浦入りの入口でもあるので、【s. 大きな】【o 湖Ⅱ入海】【sa 前】【ke ところ】シトサキでもある。香川県さぬき市志度・志度湾は【s. 大きな】【o 湖Ⅱ入海】に違いない。土浦市大字大志戸は筑波山塊の最南端に位置し、甲山という支山(situ)がある。

転音

situ→sito/sake→saki

有河・トカリ

アルカⅡ対岸/トカリⅡこちら

所在・語源

アイヌ語に、【ar-もう一方の、他方

の、片方の、片割れの】【ka 岸、ほどり、上面、表面】Ⅱ対岸。音節末追加母音化、aruga。かすみがうら市大字坂に小字有河(アルガ)・有河、隣に大字有河、並びの牛渡にも有河下・有河下汐入り。坂のアルガと大字のアルガはお互いに一の瀬川の対岸であるが、牛渡のアルガを含めて、美浦村牛込あるいは大規模貝塚で有名な陸平から見れば、対岸である。水戸市牛伏の櫻川対岸に有賀(テリガ)。対岸には、【atchake 対岸Ⅱar もう一方の-cha ち、岸(ke ところ)】もある。アイヌ語には「r は t や ch の前で t になる」という慣習があるので、archake→atchake である。「r は t や ch の前で t になる」ものにも t-r、【kotcha 前】。これも元のかたちは【korchu】Ⅱ【kor 支配する、持っている】【cha 岸】Ⅱこちら岸、目の前の岸である。atchake の ke を省略した atchake でも意味は同じ。すると、atcha kotcha アツチャコツチャⅡ向う岸こつち岸、茨城あれやこれや。a-i、アツチコツチ。アチラコチラは【atcha 対岸】【ra 低いところ】【kotcha】【ra】の転か。

kotcha に近い意味で、【tukariの手前、の此方(こちら)】がある。つくば市長高野にトカリ畑下、新牧田にとかり谷、銚田市菅野谷にとかり畑下・トカリ畑下添。トカリの当て字が思いつかなかったのか、すべてかな書きである。静岡県長泉町には上土狩(カミトガリ)・中土狩・下土狩がある。

転音

arka→aruka/archake→atchake→atchake/korchu→kotcha/tukari→tokari

牛久・牛渡・牛込

ウシⅡ入江

所在・語源

万葉集に「牛窓の波の潮騒、」と詠

まれた岡山県瀬戸内市の牛窓を始め、青森から鹿児島にかけて「牛」の付く海岸地名が分布している。そのウシはアイヌ語の【usi 入江、湾】に語源を持つ。往時、女化台地を取り囲むように、龍ヶ崎低地から牛久沼にかけて入海が湾入していた牛久は【usi 入江、湾】【kut 断崖、帯】の語尾消去母音化、usikufである。ただし、その崖は現在牛久沼の周りに散見される崖ではなく、女化台地を取り巻く長大な断崖のことであつたらう。

かすみがうら市の霞ヶ浦湖岸に大字牛渡(ウシワタ)がある。そのあたりの岸边はゆるく弧を描いている。そのことから、ウシワタは【usi 入江】【wa 縁、岸】【ka ところ】土浦入りの湾曲した岸の意と思われる。土浦入りを隔てた、ほぼ真向かいの対岸に美浦村大字牛込(ウシゴゴ)。そこは霞ヶ浦が土浦入りに曲がりこむところである。これは【usi 入江】【kon 曲がり、どんぐり】の語尾追加母音化、usikomeであらう。

ひたちなか市大字牛久保(旧那珂湊地内)は小入江の窪みの地だったかもしれない。潮来市大字牛堀は江戸時代の丑年に堀を築いて出来た土地であるという。

転音 usikut→usikut／usikom→usikome

字藤坂

ウトウ＝善知鳥

語源・所在

横穴を掘りそのなかで産卵・育雛するウトウという鳥があり、由来はわからないが、善知鳥と書く。青森の善知鳥神社の本体は洞窟であり、宮崎の鶴戸神宮は洞窟の中にある。そのように、ウト、ウトー、ウドは各地で洞穴を言う。独活(ウド)の茎も空洞である。語源はおそらくア

イヌ語【uturu あいだ(間)】＝ut 肋骨oro 中↓ウツロ(空虚)であらう。その「」が消えた(例トコロトコ)のがウトウ、ウト。地域によってそれは、狭く深い谷や崖、両側が高く切り込んだ道の意味になった。栃木県の塩原には善知鳥(ウトウ)沢がある。善知鳥坂も近畿以東に見られ、谷間の通路や切通しを言う。銚田市借宿に宇藤坂、上富田にウツウ坂、大和田に宇都宇坂・宇都宇山、飯名にウツロウ坂、鹿嶋市上戸のウトウ坂もそのようなどころであらう。反対に「」が消えればウロになる。なんと、銚田市飯名には、より原音に近いウツロウ坂があつた。

転音

uturo→uturo→utro／uturo→uturo
→uro／uturu→uturu

目下

クサカ

所在・語源

クサカは、伝説的には神武の大和進出時の上陸地名。河内国の最東奥の入り江で、日本書紀は「草香(クサカ)津」、古事記では「日下(クサカ)の蓼(タゴ)津」。日下貝塚のある東大阪市日下町あたりと思われる。クサカに日下をあてたのは、大和から見て西↓日没↓日下の方向にあつたからであらう。万葉集にも、「日下(クサカ)江の入り江の……」とうたわれていた。日本語であるのに、日本語では語源が全く分からないそれは、アイヌ語で、【kusa 対岸へ舟で運ぶ、舟で渡す】【ka 岸】渡船場のことであつた。しかし、神代に近いころ、大阪でアイヌ語が使われていたわけではない。それは、縄文語だったのである。そうか、埼玉県の綾瀬川を挟む草加(クサカ)も草加(クサカ)だったか。茨城の古河市(旧総和町)大字水海

(ミズウミ)・前林にも、それぞれその日下(クサカ)に関係した小字名の日下部(クサカベ)がある。クサカの語源は右のとおり、【kusa 対岸へ舟で運ぶ、舟で渡す】【ka 岸】渡船場。部はアイヌ語にある【pe 動詞・形容詞―それも必ず子音で終わるもの―について、「……するもの」「……であるもの」の意をあらわす。】が、日本語になって、動詞とか子音に関係なく、田舎ツペ・ノンベー・語り部など者という意味にも使われたようである。茨城にはゴジヤツペもある。

一方、鬼怒川を挟んで、下妻市・八千代村・常総市などに草間さんがみえる。どうしてそのような姓をつけたか不思議に思ふかもしれないが、おそらくそれは、【kusa 対岸へ舟で運ぶ、舟で渡す】【ma 潤(マ・入り江)】、渡船場の入り江とか船溜まりということではなかつたか。

大脳のパニック(一)

菅原茂美

人は誰でも、強烈なプレッシャーによるストレスを受けると、「頭が真っ白になる」「あがる」「慌てふためく」「パニックになる」など…経験があると思う。

一生を左右する何かの資格試験とか、大衆の前でのスピーチとか、仕事の期限とか、最愛の人を失うなど、更に地震や火災の現場など、何をどうして良いか慌てふためく。テロや犯罪や自然災害など、治安を預かる人は、その判断いかににより、多くの人命に深く関わる。

受験生など難解なテストに冷静さを失えば、日

頃の実力が発揮できない。又、自宅が火事になった時、気がついてみたら、裸足で、枕一つを抱え、飛び出していた…などという話を聞く。

最もこんな時、冷静でいられたら、超大物だ。大聴衆を前に、大演説をぶつ政治家など、心臓にどんな剛毛が生えているのか。献体提供でもあれば、ぜひ覗いてみたいもの。政治家たるものは、大事件の発生などあれば、うろたえず、じつと構えて、天下国家の未来像を冷静に判断し、遺憾なく、リーダーシップを発揮してもらいたい。

さて、そのパニックであるが、そもそも、その原因は、おデコのすぐ内側にある大脳皮質前頭前野（進化の過程で、最も後から発達し、人間を人間たらしめている脳領域）が、日頃は情動を抑制し、コントロールしているが、突如重大な危機に遭遇すると、その機能を失うためにおこる現象といわれる。

意識的に自らをコントロールしている「神経回路」は、ちよつとしたストレスにも、非常に弱くなるのだと言われる。大脳表面の前頭前野が機能しなくなると、大脳深奥部の「原始的な脳」が実権を握り、情動を支配し、食欲・性欲・暴力・ギャンブルや薬物依存、更には、衝動買いなどが、何の躊躇もなく前面に躍り出てくる。

進化論的には、高次の「脳」構造が、明確に表れてくるのは、魚類以降の脊椎動物からである。

脳は、脊椎動物の中枢神経系を司る臓器であり、人の大脳は、1350億個（脳全体の85%）である。人の大脳は、約150億個の神経細胞と、その支持機能のグリア細胞や血管や分泌細胞からなる。神経細胞は、互いに連携し合って、精神機能や感情を支配し、生命活動を調節したり、体の他の部

位から入ってくる信号を受け取って判断を下す。ヒトの脳は大脳・小脳・幹脳の3部が、はっきり分かれており、頭骸骨に保護され、更に硬膜・クモ膜・軟幕の3つの髄膜に覆われている。

6千年前のエジプトでは「心の座」は心臓に、4千年前のバビロニアでは肝臓にあると考えられていた。しかし、「医療の父」と言われた古代ギリシャのヒポクラテス（BC460〜BC375）は、人の心は「脳」にあると称え、その書に表わしている。現代科学では、「心脳一元論」で、「心は脳の活動そのもの」であると言われている。

しかし、熱いやканに触れると「反射」的に手を引くのは、脳の活動の結果ではあるが、「心」とは言わない。また、睡眠中の夢は、活発な脳活動の結果であるが、これも心とは言わない。「心」や「意識」は、脳の活動の一部である。

【さて、背骨は無いけれど非常に頭の良いタコなどもいる。更に、ハチやアリなど、人間の知恵も及ばない高次の社会生活を営む。そしてハナアブは、自らは針も毒もないのに、強烈な毒針を持つスズメバチに擬態し、捕食者の目を欺く。また、蚊類は世界に2000種、日本に100種いるが、昼間のヒトスジシマカ（ヤブカ）や夜行性のアカイエカのメスは、脳味噌もない癖に、あんな小さな体をして恐怖の吸血鬼だ。10日も離れて、人の吐く息の二酸化炭素や熱を感じ取り、刺しにやってくる。コガタアカイエカは日本脳炎を、熱帯のハマダラカはマラリアを媒介し、世界中で毎年、200万人もの人間を殺す。その他、シラミ・ノミ・ダニ、更にサソリ・ドクグモなど、その名を聞いただけでも身の毛がよだつ。万物の霊長も、微生物や昆虫などに、軽く侮られている。

更には植物だって、虫や動物に葉を食われまいとして、強烈な毒を持つものもある。トリカブトなど毒草のチャンピオンだ。生き物は、脳味噌が小さいとか無いとかで、取るに足らないつまらない者とは到底言えない。現在この世に生き残っている動物は、偶然でも、運が良かったからでもない。みんなそれなりに、厳しい環境を生き抜く進化を成し遂げた「勝者」だからである。】

* * * * *

さて40億年前、この惑星に生命が誕生し、30億年もの長い期間、単細胞時代（それが積もり重なって原油となる）を経て10億年前、やつと多細胞生物へと進化を遂げる。後の哺乳類など脊椎動物の出現は、カンブリア紀のすぐ後のオルドビス紀（5.1億年前〜4.4億年前）からである。

脊椎動物は、魚類↓両生類↓爬虫類へと進化を遂げ、ついに2億年前、我々の先祖に当たる哺乳類の「元祖」が、全盛を誇る恐竜に怯えながら、ネズミぐらいの大きさで、チヨロチヨロ這い廻っていた。しかし、恐竜から進化した鳥類同様、哺乳類の元祖も「恒温」でこの世にデビューする。そして、6500万年前、直径10kmの小惑星が、中米ユカタン半島に衝突する大事件が起きると、恐竜は一斉に地上から姿を消す。塵芥が成層圏にまで舞い上がり、地上に太陽光が何年間も十分に届かない。植物が繁茂しなければ、大気の酸素濃度も低下する。草食恐竜が死ねば肉食恐竜も絶滅する。

そこで思わぬハプニングで空いた空間に、今まで身を潜めていた哺乳類が、我が世の春とばかりに、一気に全盛開花する。栄枯盛衰・盛者必衰そのものである。

【森で大木が一本、寿命が事故で倒れたとする。

すると直ちにその後、なにやら後釜が繁茂し、我先にと天空を目指し、太陽光を独占しようとする。生物学的にはこの空いた空間を「ニッチ」と言い、繁栄していたものが倒れると、すぐにその後を埋める者が現れる。人の世も同じみたい…。】

魚類・両生類・爬虫類など原始的な動物の脳は、大脳皮質（両生類から《古皮質》として登場）が冷静に判断するのではなく、目の前の現象に対し、原始的な脳が即決で判断し、反射的に行動する。食欲・性欲・暴力（闘争）など、生き物の基本的な欲望を、即決で行動に移す。込み合う駅のホームで、肩が触れたぐらいで、直ぐに殺人に走る人の脳味噌は、トカゲやワニと殆ど変らないと言われても仕方あるまい。

前頭前野は、集中力や企画力、意志決定、洞察・判断力、そして最も高次の「認知能力」を発揮する中枢である。脳の中では一番新しく進化した領域（人間の前頭前野の皮質の厚さは1,5mm〜4,0mmぐらいで、大脳皮質の3分の1を占める）である。

そしてこの領域の「脳細胞数」は、生まれて2歳くらいが最大数だが、細胞数は減っても、機能的には20歳代が頂点だという。2歳以後、細胞数は減少を続け、後期高齢者では、MRI画像を見ると、大脳容積は、非常に委縮している。これが、人生経験豊かな、多くの物事を熟知している人間の「大脳」なのかと驚くばかりである。

しかし、大脳の機能は、神経細胞の数に比例するものではない。多ければそれだけ優れているわけでもない。現生人類の脳容積は1350gぐらいだが、3万年前に滅亡したネアンデルタール人は、現生人類より200gも脳容量が大きかった。

知的障害者（脳容量1500g）が、ノーベル賞受賞者（アナトールフランスIIフランスの作家・脳容量1000g）よりはるかに大きな大脳を持っていた例もある。問題は、脳神経細胞同士が、いかに綿密な連携を保持しているかが重大である。ネットワークが緻密に組まれていなければならないほど、頭の回転は良くなる。思索・創作など、繰り返し訓練を積み重ね、ネットワークは強化される。

2012年7月5日、第83期「棋聖戦」を制した、羽生善治棋聖（41歳）は、日本の将棋史上、最多のタイトル保持数を、通算81に伸ばし、大山康晴十五世名人の記録を、30年ぶりに更新した。羽生さんの大脳こそ、人類史上まれに見る傑物と思われる。彼の大脳を見れば、宇宙人もきっと、びっくりするに違いない。

（辞書にはないが棋士には、「盤寿」という歳があるそうだ。将棋盤の升目は9×9=81なので、その歳までは頑張りたいと、誰でも努力をするのだという。その記念すべき、盤寿と同数81のタイトルを積み重ねた羽生氏は、正に超人と言える。）

* * * * *

さて話はそれだが、本論に入る。パニックに遭遇した人間の脳も、前頭前野の縛りが薄れると、反射的行動に走る。高次機能によるコントロールから解放された原始脳（扁桃体など）は、躊躇することなく情動行動に走る。人間世界では、理性を失った本能丸出しの行動は、反社会的行動となり、世間を混乱させる。

そして、古い脳領域に支配権が移ると、普段は冷静に判断できるものが、丁度、原始人が原野を駆け回っている時に、突然、藪陰に隠れていた強力な肉食獣と偶然鉢合わせした時のように、恐怖

のドン底に陥り、身の毛もよだつ状態になり、自制を失ってしまふ。深刻なストレスが、人間の高次機能を著しく損なうメカニズムが、最近解明されつつあるので紹介する。

【頭の中が真っ白になるとは、どういうことか？

新しく生まれた前頭前野の高次中枢は、3角形をした「錐体細胞」という神経細胞同士が、密接に接続したネットワークを介して働く。錐体細胞は、更に大脳深奥部にある原始的な脳領域である「線条体」にも接続し、生活習慣などを調節する信号を出し、生活のリズムを保持するように働く。同じく、原始的な「視床下部」には、食欲・性欲・暴力などを抑制する信号を出し、これらの暴走を抑える。そして、「扁桃体」には、恐怖などの情動反応（闘争・逃げる）を調節する信号を出している。周囲との関係が、平穏なら、これらの機能がフルに活動し、安定的な生活が保持される。

ところが、先に述べたような、テスト・仕事の期限切迫・大衆の前でのスピーチ・最愛の人を亡くすなど、そして最も恐ろしい地震や火事やテロに遭遇するなどの強烈なストレスを受けると、前頭前野の指令を振り切り、原始的な「扁桃体」が強烈な指令を出し、「脳幹」（大脳と脊髄の間に存在し、間脳・中脳・橋《きょう》・延髄を合せていう）に、①ノルアドレナリン②ドーパミンという覚醒化学物質を分泌させる。これらの覚醒化学物質の血液濃度が上昇すると、前頭前野の神経細胞の活動が抑制され、神経細胞同士が、連携を絶って「発火」しなくなる。合わせて、副腎から分泌される「コルチゾール」が、なお一層前頭前野の活動を抑制し、冷静なコントロール機能を喪失し、パニックに陥る。即ち「頭が真っ白」になる。

そして、人によって、前頭前野からの中枢支配を阻害するノルアドレナリンやドーパミンなどの覚醒化学物質を分解する酵素を、速やかに大量分泌できる人は、ストレスに強く、分泌しにくい人は、ストレスに弱い人ということになる。そして、分解酵素の分泌が少ない人は、普通の人ではあまり気にならない程度のストレスでも、慢性的ストレスと受け止め、うつ病・依存症・PTSD（心的外傷後ストレス障害）などの不安障害に繋がる。

* * * * *

ここで疑問に思うのは、人間の脳は、なぜこんなストレスで、最も大事な中枢機能が弱められるのかということである。人により、人間らしい道徳的な行動が抑えられ、本能むき出しの蛮行に突っ走るのはなぜなのか？

それは、人類の脳が発達するのは、人類誕生以来、時間と平行に大脳容積が正比例的に増加していったのではなく、およそ40万年前、人類（ホモ・エレクトウス）は「火」を自由に扱う術を手に入れた。その時から加速度的に大脳容積を増している。即ち、新皮質（前頭前野）が急激に増加したのである。これは化石人類の頭蓋骨を年代順に並べていくとよく分かる。即ち火を通して食べ物を調理して食べることにより、消化吸収が良くなり、栄養面で長足の改善が見られるようになった。ということは、人類の歴史700万年に比べ、40万年はほんのわずかの時間である。即ち新脳が旧脳を支配するようになってからの月日は非常に短い。長年の原始的な速戦即決の判断行動が身につけている。新脳を介し、超危険な場面で、冷静に行動を決定する迂回路では間に合わない。反射的に危険を回避する・又は正面から戦うなどの即

決型の行動をとる方が合理的である。そこで、危険に遭遇した時（パニックの時）新参者のでしやばりを抑え、旧脳が長年の経験から、反射的行動に移るのではないかと称える学者もいる。

私は、大脳の暴走が、地球環境を破壊し、未来人からの預かりものである地球を壊している…と今まで、この会報で声高に述べてきた。新脳の発達し過ぎが、文明を捻じ曲げ、大気や水を汚し、子孫が住みにくい環境に激変していると、何遍も指摘してきた。自然を破壊する経済成長至上主義の歪んだ国家運営政策を批判してきた。新脳の発達し過ぎた大脳を「毒饅頭」として皮肉ってきた。そして、新脳が作り上げた新たな文明が、多くの人口を養うことができるようになり、地球上は、諸悪の根源「過剰人口」のため、資源争奪戦で、ケンカが絶えず、万物の霊長などと自惚れるのは、チャンチャラおかしいと、嘆き節の連続…。

この観点から物事を考えると、新脳の発達で、変な文明が繁栄するよりも、むしろ旧脳支配で、弱い者は、子孫を残せないなどの「人口コントロール政策」が残っている方が、かえって地球上は、永遠に平穏なのではないかとさえ考える。弱者切り捨てみたいなこんな発言は、トンデモナイ…と、マスコミなどから、総攻撃を食らいそうだが、人類が永遠に繁栄を続けるためには、長期展望の荒療治が必要なのかも…。毎年8500万人も世界人口が増加するのは、粗製乱造？

* * * * *

私は人類というものを、非常に「高等な生物」あるいは「慈愛に満ちた神に近い存在」などとは、到底認識できない。人類の歩んできた「道のり」を振り返ってみると、1万年前メソポタミヤで、

定住を始める前までは、仲間同士助け合い、食べ物も分け合って、実に穏やかな、集団であった。

定住を始める前までは、狩猟採集の生活で、罅（ねぐら）を定めない、遊走生活である。人口も少なく、他の集団との距離もかなりあり、テリトリーの重複もめつたにない。たまにあつたとしても、直ちに血相を変えて、相手を殺害するような行動には移らず、穏やかに、最善の措置を取ったと思われる。そう考える根拠は、人類が最後に類人猿から枝分かれたボノボ（チンパンジー）から更に進化した類人猿は、異なる集団同士が偶然鉢合わせし、緊張が走ったとき、動物行動学者の観察によれば、互いに群れの中からメスを差し出し、相手のボスを慰め合うのだという。すると何事もなかったかのように、その場を立ち去るのだという。これをサル智慧だ！ 出来過ぎた作り話だと笑ってはいけない。レッキとした科学者が学会報告しているのだから…。とにかく人類は、遊走生活から定着し、食糧を蓄え始めると、貧富の差が出来、喧嘩や争いの絶え間がない。

異なる集団が衝突したとき、直ちに戦闘態勢に入る等の話は、人類が歴史を重ね、文明が発展し、生物としての「ヒト」が「人」化してからの話であろう。即ち、大脳前頭葉が発達し、競争意識が増幅し、自己主張が強化され、利己主義が根付いてきてからの話であろう。

これはどちらかと言えば肉食の多い西洋人の考え方、人類は、あたかも肉食を主体とした進化を遂げてきた…とする偏った思考と言える。今、化石人類の胶原蛋白を主体とした肉食ではなかったことが分かっている。どちらかと言えば、動物

タンパク質は、魚介類が主体のようである。

人類が、より高尚に生き抜くために進化した新脳は、万能ではなく、むしろ未熟な新参者である。トラブルに遭遇すれば、慌てふためき、最適な判断を誤る。進化した新脳は、基底部の旧脳の反乱を抑えきれず、いくら文明が進んでも大きな問題を抱えている。文明の進歩は、衝動的な原始脳の反乱を抑えきれないという、内部矛盾を常に抱えている。

亥のさん大往生

伊東弓子

亥のさんが大往生の日を迎えたのは、猛暑の真盛り八月三日の事だった。あれから四十六年の月日が流れた。亥のさん、番頭さん、大げさと呼ばれ親しまれたその人の年令は分からなかった。七十才位とも八十か否九十才に近いと言う人もいた。私たち家族は「番頭さん」と呼んでいた。番頭さんが亡くなった。と母が本堂の方から走ってきた。急いで行くとまだ温もりが残っていた。枕元の皿の上に一口齧った薩摩芋が残っていた。穏やかに眠りについた表情だった。八月に入って体が懈いと横になる事が多かったようだ。例年だとお盆に掘るものを早めに掘って「番頭さんの大好きな薩摩芋、蒸したからね。初物だから元氣が出るよ」と、母があげたその一つだった。私は結婚式を七日に控えていた。夕べは仲間たちが祝いの会をもってくれたので出かける事になっていた。何か気に掛けて「番頭さんも知っている小坂橋先生の所へ行ってくるね」「ゆっくり行ってくるといい」

と答えてくれた。それが最後の会話だった。親戚もないので寺の家族と近所の人達でお弔いをした。あれから長い時が刻まれ、私も人生の大半を過ぎし老人の仲間入りをした。時が経った今でも世間話の中に時々登場するのが亥のさんだ。

「あの大げさは何処に住んでいたんだ」

「葬式に坊さまについてきたっけな」

「いや喰うこと、焦飯でも残りもんでもよく喰ったな」

「いつも小奇麗にしていたっけが、面倒みる人も大変だったべ」

「うでも大げさは悪い事はしなかった。きつと極楽へ行ったっべ」

人々の生活の一部に印象強く残り、地域の中の有名人の一人だったのだろう。語りつく程の人物ではないと笑われるかもしれないが私も亥のさんの年令に近くなつたから感じるものがあった。綴り始めた。今年又暑い八月を迎える今「玉里先人の墓」に眠る亥のさんに手を合わせて偲んでいる。

亥のさんが寺に来る迄の事を聞いた事がある。

子供の頃の事は全く分からない。若い頃の事は祭りが楽しかったということだけだ。近郷近在何処迄も出かけて行ったそう。沖洲に此処と同じ「雷電山」という寺があったと話してくれた。背が高く長い脚と丈夫な足は老いても変わらなかった。石岡の製糸工場の夜の守衛をしていた頃の話しもあった。寮生活をしている娘達が門限を守らないので、上役が困り厳しくして欲しいと頼まれたそう。少し位注意しても娘達の方が一枚上手で「守るよ、分かったよ」と出て行くが、結局戻って来ないので門を締めてしまうのだが、惨めそうに「明日仕事が出来ないと困るよ。里へ金送れない

よ」の言葉に釣られ、明けてやる事が度重なり辞めさせられたという。その後身を固める様みんなの世話で、女房と子供と落ち着いた生活が続いた。（彼処の屋敷がそうだと場所も聞いて分かった。家族の若い日の姿を想像してみたりして通った事もある。そんな末の間顔馴染みの人達に誘われて夜出かけた。お前は此処で見張っていれればいい。誰か来たら適当に言っとけ、帰る時は声かけっから…と皆の姿は消えた。何時迄経っても仲間に戻って来ない。その中にお巡がやって来て「何してんだ。薩摩芋泥棒の一味だな」と石岡警察の豚箱に打ち込まれたという。その後仲間知らぬ振りをしていたという。豚箱にどの位いたか帰ってくと女房、子供の姿はなく家財一式なかったという。元来働く事が身についていないようで、彼方此方で貰って歩く姿が多くなり、お腹を壊して近所、隣りは心配が絶えなかったという。先代代の任職が「寺に来るといい」と、本堂西側の部屋に住むようにした。昭和十二年先代は亡くなった。それ以前の話しであった。母は十二年に寺に来た。母から亥のさんは腹を立てる事もなく綺麗好きで、悪い心等持っていない人だった。沢山食べる事も戦前は苦勞ではなかったが、終戦後の食糧不足の時は遣り繰りに苦勞したと言う話しは聞いた。

私が物心ついた時は一緒にいるお爺ちゃんという感じで、あつたが家族は番頭さんと呼んでいた。とても早起きで一年を通して井戸端で顔を洗い、頭迄洗っていた。丸坊主頭も時々バリカンで刈って貰う姿も見た。歯は殆どないが、口をよく漱いでいた。水は飲まず茶釜の白湯を飲んでた。鏡の破片を立てかけ、手慣れた格好で剃刀（和風）で髭を剃った。私らは板の間で食事をしたが、そ

の上がり縁で食べていた。大きな丼にご飯、御数をのせ味噌汁を掛けて二杯食べた。常に素足で草履履き、田股引式の物を穿き、暑い時は裸、冬はシャツと半天という薄着だった。正月と盆前には新しい物を母が用意する。それを有難く有難く貰っていた。汚さないように無駄にしないように壊さないように大切に扱っていた。現代人に欠けているものを持ち合わせている人だった。お風呂は殆ど入らず井戸端で良く拭いていた。仕事をするのは苦手、心がのらない、怠け者？ 分らないが一人では出来ない様だった。父が役場に行く前に言われた事もしないので伯母が手伝ってさせようとしたが、なかなか聞かず逃げ回っていた。ある時は干しておいた豆が雨に濡れ父に大分怒られていたが、その後も何度かあった。身につかず育ってしまった不得意なものはどうしようもないのだろう。

何といっても楽しい事はお葬式に行く事だった。坊さんの衣や仏具を入れた箱を担いでお供するのだ。当家の勝手場の女衆が声をかける。「ほーれ大げさが来たよ。うーんと振舞ってやっておくれ」とすると周りも囃子たてる。「大げさ残飯ほーりこめ、ほーれほーれほーりこめ」世間の人からは「大げさよ」と呼ばれていた。意味が分からないが沢山食べるからかなと思っている。鳥の鳴きが悪いから近い中に、じゃあぼがあるぞ、と喜んで、円妙寺の老住職を街道口で待ったりする姿は無邪気だった。帰ってくる蓮の花の塩釜の菓子子供等にくれた。それも私等姉弟の楽しみ一つだった。

あれは中学時代の冬の夜、何処かで声がする。「この馬鹿野郎等。大げさ大げさって馬鹿にす

んな。俺だって怒ってんだ。面白くもねえ。大げさ大げさって言うな！」

と怒鳴っていた。用を済ませた後のようだ。すぐ布団に戻ったのだろう。その後はもう声はしなかった。そんな事が冬の間に四〜五回あった。世間の人とはもの乞いの恰好をして一緒になつて騒いでいたが、心の奥底には悲しさも悔しさも詰まっていたのだろう。それらが暗みの中へ吐き出されて行つたのだろうと思うと、私が友達から受けた批判や虐めも踏み潰して行かなければと思つた。「おめえらは大げさがいつから、大げさのお蔭でいろいろ仕事やって貰って楽だっぺ。いいな。顎で使つてんのか」

そんな言葉より家族として暮らしてきた絆の方が強い事を胸張って示し、番頭さんを守らなくちやと心に決めた日があつた。

伯母が亡くなって四十五日の頃、

「かんかちゃんも針の山無事に越えたかな」

「いい人だったから地獄へは落ちなかつたらね」と言いながら無花果の枝に下げた伯母の半天に水をかけていた。百日を経つた頃、

「もう骨になつちやつたかな」

と現実的な話しをしながらも、

「父ちゃん母ちゃんに合えたかな。甘えてっかな」

と優しい気持ちで垣間見せていた。喧嘩相手だった伯母のいなくなった淋しさに耐えている様子も伺えた。寺に来る人、関係のある人は「亥のさん」と呼んでくれた。亥の”とは亥年生まれだからついた名なのか。一人の人間として呼んでくれた名だと思ふ。

亥のさんも明治、大正、昭和と沢山の人の係

わりの中で泣き、笑い、怒り、喜び、悲しみながら生きてきたことを覚えててやりたいと思ふ。いろんな分野で能力を生かしている人も素晴らしいが、目立たなくても確り生きている人がいることを忘れてほしくない。

鹿の子史跡公園

兼平ちえい

当会報第七三号より常陸風土記の丘、有料エリア内の施設についてご案内しています。今回は最後の施設、鹿の子史跡公園をご紹介します。

第七四号で紹介しました古代復元広場を前にして竜神山を背に南向きの配置の建物群が、常磐自動車道建設に伴い昭和五四〜五七年の発掘調査で発見された鹿の子C遺跡の一部を復元したエリアです。

漆紙文書や連房式竪穴遺構などが発見され、全国から注目を集めました。この遺跡は八世紀末から十世紀にかけて存在した集落と考えられ当時の中央政府の命により建設された軍需品の製造や修理を行った補給基地と考えられています。その遺跡を町並みごと復元し鹿の子史跡公園と命名しました。発掘された建物の跡からは掘立柱・控柱付瑞籬門の古い形と考えられる門の入口を中央に設け、西側には周囲を溝でめぐらした官衙ブロック(役所的な機能を持つところ)、跡。そして東側は住居ブロックと工房ブロック(鉄品や銅製品を作った作業場)跡と分かれており、この東側のブロックには四棟復元されています。

2号連房式竪穴遺構：長屋形式の茅葺き屋根、

遺構から炉跡1基、カマド4基、漆付着土器、瓦、砥石、小札、釘等が床面全体から出土、炉跡、カマドがあるところから住居と工房を併用していたと考えられます。

5号連房式竪穴遺構：屋根は入母屋造り茅葺き、採光と換気を図っている、カマド2基、土器・鉄製品等出土、用途としては連房式の竪穴住居と考えられます。

SX-01・I号工房：切妻造り割板葺、炉跡が7基出土、用途としては鍛冶工房と考えられます。

SI-145号：竪穴住居で屋根は入母屋造り茅葺で、採光と換気を図って住居と考えられます。

次は西側の周囲を溝で守られた官衙ブロックに参りましょう。八棟の建物が建ちならんでいます。ほぼ中央の位置に建つ、ひと際規模の大きく廂の付く建物に目が行きます。役所的な機能をもつ管理棟です。屋根は寄棟造りの茅葺き、壁は茅壁、床は土間床。風格が感じられます。この建物の前には建つ二棟と後ろの一棟は寄棟造り茅葺き、壁は土塗壁、土間床、いずれも武具や鉄製品等、仕上げ作業の工房として、或いは特殊な作業棟と考えられます。また先にご案内した三棟と同じような、工房製品の整理や仕上げ等の作業場として考えられる建物が一棟、建物群後方に位置しています。棟持柱で棟木を支え、屋根は切妻造り割板葺、壁は板壁、土間床。まるで倉庫のような様相です。最後に残された三棟は倉庫群です。その内の二棟は切妻造り割板葺、壁は板壁、土間床。そしてもう一棟の貴重な倉庫は高床式倉庫です。官衙の貴重品を収納していたと考えられるこの倉庫の屋

根は、切妻造り厚板流れ葺で、厚板の接ぎ目目板を打っています。こちら高床式倉庫についてのご案内の折に「ねずみ返しはどこですか」と小学六年生からの質問が多くあるところです。

こうして奈良・平安時代にしてそれぞれの用途に応じた建物の違いを感じる事ができます。そして此の地に工房が設けられた時期は、出土した土器や漆紙文書などから八世紀末頃と、考えられ桓武天皇の御世で、蝦夷征討が最も激しく行われた時期であり、常陸国は、前線基地の多賀城(宮城県多賀城市)に近いと云うことで、軍役の挑発、軍糧や武器の調達、補給物資の輸送など、重要な役割を果たしたとされ、歴史的・社会的背景をもとに各種、武器調達を主たる目的として、設置されたものであることを物語っております。古代史解明に貴重な資料を提供してくれた鹿の子C遺跡の主要部分は常磐自動車道となっており、今は常陸風土記の丘鹿の子史跡公園で遠い平安時代の世に思いをはせるほかないでしょう。

ここで振り返って見ましょう。「市報いしおか」、昭和六十二年六月号より抜粋します。

「竜神山麓に生涯学習の里」

過去から現在、現在から未来へと営みを続ける「郷土」を考えると、ここで私たちが共有できる財産は自然と歴史しかありません。過去は未来へのカギであるといわれるように、よりよいふるさとづくりの第一歩は、まず郷土の歴史を知ることです。肥沃な土地に豊かな心が育ってゆきます。一人でも多くの人が、郷土の歴史を学び、心豊かな文化活動を行えるように」とそんなポリシイを基に、生涯学習の里は計画された事業です。新しいふるさとへの拠点完成にご期待ください。……と。

2012 CONCERT SERIES

ギター文化館は今年で20周年を迎えます。
魅力あふれるコンサート企画で皆様をお待ちいたします。どうぞよろしくお願いたします。

- 9月9日 里山と風の音コンサート
- 9月30日 高野行進 jazz live
- 10月6日 谷島崇徳・谷島あかねギターとピアノデュオ
- 10月7日 長谷川きよしコンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

《ふうの》

アレシシ蕎麦・蕎麦会席料理のお店です。

(ギター文化館通り)

看板娘(大)「つらら」ちゃんが

皆さんをお迎えいたします。

電話0299-43-00008

生涯学習の場としての施設である、常陸風土記の丘は平成二年八月にオープン、そして二十二年の時が流れました。

(参考資料「石岡の遺跡」石岡市教育委員会)

・ママの手 孫のて あお蛙 ユリ覗く ちえこ

《特別企画》

虚構と真実の谷間

打田昇三

第四章 霧の中の栄光 (3・1)

敗戦後間もない昭和二十年代は種々の形で既成の価値観が否定された影響から、組織の中で働く「その他大勢」にも普段は耳にしないような話が伝わってきたものである。日露戦争の軍歌「水師營の会見」などで知られた乃木將軍の家系が絶えるというので、私が居た地区では或る幹部の青年が乃木家の養子候補にあがったという噂話が広がった。戦国時代から強豪で知られた西国の有力大名の血筋を引くという―顔立ちは昔の公家を彷彿(ほうふう)させる若者なのだが、酒好きなための失敗もあり、結局は養子の話も立ち消えになっただらしい。本人はケロっとして、その後のほうが生き生きとしていたように見えた。人間は肩書や家柄など自己満足的なものはないほうが伸び伸び出来るかと教えられたようなものである。

個人的な話で恐縮だが職場には他にも有名な人の親戚と噂された人物が何人か居て、その一人の◎◎さんは紛れもなく現在も活躍中の大女優の従兄弟だと言われ、出身地も同じであり、品のある美男子で目立たないが真面目で理知的な青年であった。実は、その時の私は長期教育研修に出ていて終了後はある部門に配置替えという内示を受け取った。そこは幹部職員ばかりの職域なのでゴマが上手に摺れば将来的に有利とは思われるが「その他大勢」は殆ど居ない。行けば雑用に過ぎ使われるだけだと判断したから「…死んでも嫌だ！」と人事に回答をして置いた。これが「足軽

の分際で生意気だ！」と管理職の間で大問題になり、私は「要注意人物」に登録されてしまった。当然ながら内示は取り消され、私の替わりに行かされたのが一期先輩になる◎◎さんだった。私は陽の当たらない現場で牢名主のように恵まれた？勤務を送ることが出来て、◎◎さんは頭脳集団の一員となり颯爽と活躍をしている…ように見えたのだが、なぜか途中で退職されてしまった。

「人間万事塞翁が馬(にんげんばんじさいおうがうま)で、長い人生となれば何がどう変わるか予測がでない。運命には素直に従ったほうが神様の受けが良いのかも知れないけれども、道が二筋に分かれていれば犬でも立ち止まって考える。まして人間は犬ほどに嗅覚が鋭敏ではないから、判断や選択は自分の好き嫌いでするしかない。

前編では、新興勢力の大和朝廷に郷土を侵食され東北地方に押し込まれた本来の日本民族が、さらに「武士団」と称する稼ぎ屋に反乱征討の名目で安住の地を掻き回された過程から歴史として伝えられる幾つかの「嘘」を掘り返してみたいつもりだが、そう言う中で登場して貰った人たちでも、人生の岐路で迷い判断し、その結果により或いは名を挙げ或いは史上から消されている。後編では嘘か真実かは曖昧ながら、自分が置かれた立場で精一杯の主張をした人物に焦点を当ててみたい。それが無駄であったか、成功したのかは後世の人々の歴史判断に依るほかは無いのだが…。

前章の冒頭で述べたように頼山陽は「日本外史」の中で東北地方を日本列島の頭部だと表現した。昔の合戦では兜をかぶり、現代の戦場には鉄兜があり、地震でも火災でも作業の現場でもバイクに乗るにもヘルメットを被る。身体の何処よりも頭

を護るために人間は苦勞をするのに、国土の頭部で有った東北地方が、護られるどころか次々と侵略されたのが戦国時代までの日本の歴史である。純朴な東北地方の人々の中には征服者を「英雄偉人」として崇めさせられている例があるらしい。

それはなぜか？と幼稚な疑問を持っていたところ或る雑誌の記事で学者や作家の方々が対談の中に述べて居られた内容にヒントがあった。大仏建立にも貢献したことが知られるように陸奥国からは黄金を産出した。第四章前編でも触れたように「後三年の役」の発端となった出来事は、「前九年の役」の勝者・清原氏の婚礼の日起きた重臣の「黄金投げ捨て事件」である。幾ら腹が立ったからと言っても山のように盆に盛り上げた「金」を地面にバラ撒き、憤然として帰って行く―この出来事に象徴されるように東北地方の人々は「金」に対して関心が薄かったといわれる。

反対に西の方に犇めく(ひしめく)連中は光り物に異常なまでの執着があった。法隆寺の金堂、奈良の大仏を始め金閣寺、安土城、金鯱鉾、聚楽第などから仏像、壁画、金屏風、装飾品まで幾らでも需要が有ったから、牛若丸を鞍馬山から連れ出した金売吉次のような商売が成り立った。専門店が無かった頃は「まつろわぬ(服従しない)者どもの征伐」という大義名分で、坂上田村麻呂に代表されるような戦争屋が「金」を頂きにやってきて、住んで居た人々の命まで奪っていった。

前九年の役の源頼義、後三年の役の源義家とも陸奥国司に任命された際には「黄金花咲く陸奥」を想定したと思われるが、事件が複雑化し敵味方が入り乱れて戦った結果、成り行きから藤原清衡だけが勝ち残り、豊富な「金」の使い道が無いか

ら平泉に三代に亘る黄金文化を築くことになる。源氏が二代続く奥羽地方への関わりで、どのくらい「お宝」を手に入れたかは知らないが、源義家の場合は中央政府から怪しい合戦だ？と思われて御褒美は頂けず協力者には自腹でお礼をした。しかし東国武士団との間に絆が出来て、それが後の頼朝の旗挙げなどにプラスになった―と考えられているから、金は駄目でもドウにか、それなりの儲けは有ったらしい。

頼義から三代目に当る為義は義家の孫である。父親が政府に反抗して誅されたために祖父に養われ北面の武士として白河法皇に仕えていた。永久元年(一一三三)に比叡山や奈良の僧兵たちが騒ぎを起こし、白河法皇の裁定を不服として院の御所に押し掛けようとした。第三章でも触れたが「双六の賽、賀茂川の治水、山法師は思うようにならない」と嘆いたことで知られる白河法皇は、警護の武士たちに対応させようとしたけれども逃げたのか隠れたのか、肝心な時に法皇の傍には源為義しか居なかった。下命を受けた為義は僅か十六人の家来を連れて僧兵の陣に立ち向かい、説得に応じない二千余の群衆を退けた。

白河法皇は喜んで「国司に推薦してあげよう何処の国が良いか希望を述べよ」と言ってくれた。為義は迷わず「陸奥国」を希望したけれども法皇は「源氏が陸奥国へ行くと碌なことが無いからダメ！他の国にしなさい」と言い「もし陸奥国へ行けば平泉の藤原基衡(清衡の子)と合戦になることは明白である」と忠告してくれたのである。しかし為義は「陸奥国以外は貰ってもしようがない」と、比較にはならないが現役時代の私のように放言をして問題になつたらしい。為義は奥羽地方に

拘(こたわ)つた理由を「先祖の国だから」と言っているが、大阪出身の清和源氏に戸籍を変えさせるほど「黄金」は魅力的なのである。

それから七十六年後の文治五年には、為義の孫の頼朝が藤原氏討伐のため大軍を率いて奥州に侵攻してくる。ごく一般的には頼朝に逆らつた義経が諸国放浪の末に藤原秀衡を頼つて平泉に匿われたため、それを許せない頼朝が攻めて来たように思われているが、義経は頼朝が出かける二か月前に藤原泰衡に殺害されている。頼朝にうとまれ苦し紛れに「頼朝追討」を企んで失敗した義経は逃避行を続けて藤原秀衡を頼り、文治三年二月頃に平泉へ逃げ込んだ。これに対して頼朝は後白河法皇に言い掛かりを付けて、院宣(法皇の出す公文書)で秀衡を責めさせた。公私混同、兄弟喧嘩に国家を巻き込んだのであつて大義名分は無い。

秀衡は形だけ「ゴメンナサイ」と言つておいて、その年の十月には死んでしまうのだが、臨終の床に息子たちを集めて「…奥州の国を挙げて義経公を守り、頼朝を討て！」と遺言をした。兵力も財力も、鎌倉に対抗するだけの自信があつてのこととそれを支えていたのは「陸奥の黄金」であろう。ところが、跡取り息子の泰衡は世間ずれがしていない。「院宣」に恐れて父親の遺言ビデオから「義経公を守り…」という部分を消去してしまつた。序に財産目録を隠したかどうかは不明である。

嘘っぽい俗説で「源義経が生き延びて大陸に渡りジンギスカンになった」とする話がある。義経の死亡が西暦一一八九年で、ジンギスカンの即位が一二〇六年なので年代的には合う部分もある。しかし藤原泰衡は頼朝に追従する魂胆で早々と義経を殺害し、その首を漆塗りの箱に納め、中に上

質の酒を満たして密封し鎌倉まで送り届けてきたのであるから小細工をして義経を逃がしたとは考え難く、ジンギスカンもすき焼きも嘘だと思ふ。

頼朝は、届いた義経の首を自分では見ずに和田義盛と梶原景時に検査をさせた。二か月もアルコール潰けになつていたので人相は変わつている。

義経本人で有るような、似て居ないような…DNA検査に持ち込みたいけれども鎌倉には設備が無いから目視検査しか出来ない。二人の検査官は微妙な責任問題を考へて有りの俣を頼朝に報告しておいたのだが、何処からか情報が漏れて「…義経は死んでおらず、奥羽地方に隠れているのではないか？」という噂が流れ出した。しかし、それを聞いても頼朝は義経の死について深く追求する様子が無かつた。ところが周りにいる武将たちは適当なところで妥協して後で疑いを掛けられるのが心配になつてきた。そこで頼朝の周辺に兵力が集まつた機会を利用して「奥州に攻め込むチャンスである」ことを進言したらしい。

一方、藤原泰衡は余計な気を回して父親の遺言に背き義経を殺害してしまつたけれども、頼朝と対決する意思は無かつた。むしろ頼朝に「良くやつた」と言われたくて義経を襲つたのであろう。しかし頼朝にして見れば、弟であるから簡単に殺されても喜べない。双方、複雑な心中で憎しみがつのり始めた。泰衡側では兵力は十分に対抗できるし要害天嶮の地の利を生かして鎌倉の軍勢を退ける防備も整つていた。その頃、裏で緊密な連絡を取り合つていた後白河法皇からは「合戦は避けるように」言われていたので、一の谷合戦で騙された平家のように「休戦」を期待したのであろう。「平泉」と言うか「奥州藤原氏」の研究を独自に

進められた東北大学名誉教授の高橋富雄先生（日高見国は北海道では無く常陸国Ⅱ信太であることを主張された方）は、「（奥州藤原氏が）奈良、京都のほか地方にも政治都市、文化都市を造ることを目指した―それを最初に試みて実現出来なかったのが平将門で、完成したのが源頼朝の鎌倉幕府である：」と言うような説を「シンポジウム平泉」で述べておられる。地の利は有っても文化都市として造られた平泉は、黄金目当ての敵に対して要害堅固では無かったのであろうか。

軽率としか言いようの無い藤原泰衡は義経の首を鎌倉に発送してから、鎌倉の動向が心配で後白河法皇に手を回し情報を貰った。心配の内容は「首を酒漬けにせず、焼酎漬けのほうが良かったか？」と言うような単純なことでは無く、自分の行動を頼朝がどう評価したか？である。その情報の中で鎌倉に「奥州遠征の動き」があることを知った。そこで法皇に嘆願して「遠征を止めるように：」頼朝に申し入れて貰ったらしいのだが、鎌倉では聞こえない振りをした―と言うよりも、既に平家を滅ぼしてしまつて功名を顕す機会を失つた武士たちが「合戦待ち」で鎌倉に集まり始めた。

頼朝自身も日本の頭部を直に支配したいと思つている。ここで「戦争反対」を言い出せば只では済まない。頼朝の邪推を恐れた家臣が「戦時態勢下では天子の詔よりも將軍の命令が優先する」と儼が生えたような中国の故事を引合いに出して法皇の制止を無視するよう進言したのである。こうして必要の無い奥州攻めが強引に実行されることとなつた。「反逆者・源義経を庇つたこと」が理由とされているが、義経は既に首が鎌倉に配達され胴や手足は衣川にと、何とも不ばな姿にされ

ていたので、鎌倉側（源氏）の本当の狙いも「奥州の黄金」であつたと勘ぐらざるを得ない。

それより先立つこと八年、平清盛が怒りの発熱で死亡した養和元年（一一八二）に藤原秀衡は朝廷から「陸奥守」に任命された。推薦したのは平家である。既に「鎮守府將軍」であつたから、これで東北地方は完全に藤原氏の掌握下に置かれたことになる。その頃は源頼朝が鎌倉に居て主に関東を抑え、木曾義仲は北陸から京都に向けて進んでおり、源氏に攻められた平家は防戦に苦心しながらも西国に強力な地盤を保つていた。源義経が、匿われていた秀衡の許から何人かの家来を貰つて関東を目指し、頼朝の陣に加つた頃の藤原秀衡は奥羽地方の覇者ではあつたが、基本的には平家グループの人物である。

源平いずれが勝つか不明な体制下では仕方が無い構図であるが、やがて頼朝が義仲を敗退させ、平家を滅ぼし、従来の国司制度に替えて「守護・地頭」という支配制度を作り「総追捕使」を置いて軍事警察権を握ると、日本の頭部・奥州に君臨していた藤原氏の存在自体が鎌倉には「在つてはいけない」ものになつてしまふのである。それに金ピカが加われば尚更のことである。東北の歴史では源義経の存在など「通行人役」に過ぎない。

文治五年（一一八九）七月十九日、後白河法皇が止めるのを無視した源頼朝は三十万に近い軍勢を催して奥州を攻めた。七十六年後の日露戦争で、最後の血戦となつた奉天の会戦にロシア陸軍が国力を挙げて繰り出した兵力とほぼ同数の軍勢が源頼朝の個人的な欲望で駆り出されたことになる。

平安時代末期は武士が暇な時代だつたらしい。頼朝は兵力を三軍に分けて進発させた。先ず「東

海道軍」は桓武平氏良文流の千葉常胤と、小田氏の祖となる八田右衛門尉知家が大將軍となり、下総国と常陸国の武士団がその他大勢として付けられた。石岡で自慢の大掾一族も、その軍団に入つていたと思われる：と言うのは二日遅れで奥州征討中央軍として鎌倉を發つた頼朝に従う有力武士団の中に多氣大掾義幹の名が無いからである。一行は下総国から船で霞が浦を渡り行方郡經由で北上して行つたと推定される。

かつて東北地方遠征では拠点となつていた常陸国府が遠征軍団に素通りされる時代となつたのである。これは中世への時代の変化と言うか、四年後に起こつた「曾我兄弟の仇討事件」で八田知家に騙されて没落する多氣大掾氏の命運を予測するような「東鑑」の記録である。くどいようだが頼朝が創設した「守護、地頭」の支配構造により律令制度に基づく地方官職の「国司守、介、大掾、少掾、目、史生」や押領使、追捕使などの職が何の権威も意味も持たなくなつた。近代では昭和二十年八月十五日と同じことになつたのである。

話を奥州遠征に戻すと鎌倉の留守を任されたのは藏人大夫頼兼で、この人は第三章前編に「反平家運動の先駆け」として紹介した源三位頼政の次男か三男と思われる。宮廷守護の武士に徹していたから平家の弾圧を恐れ、やがて頼朝に仕えた。

頼兼には何人か古老の旧臣が付けられた。第二軍は北陸道を進み、比企藤四郎能員、宇佐美平次実政が将となつて北関東、上信越の兵を従えた。比企氏は頼朝が伊豆に流されて来た当初からこれを扶持した比企尼の一族であり、宇佐美氏は第三章で登場した工藤氏の支流である。そして頼朝が率いる中央軍には畠山重忠が先鋒を担い、本隊には

武田一族、北条一族、源範頼、旗挙げ当初から参加した三浦、土肥、和田、岡崎、狩野、佐々木、加藤、葛西などの諸將に梶原、熊谷、新田ほか有力武将と側近の小山、結城、藤九郎盛長ら一五〇名以上の東国武士が従った。東海道軍の将である菅の八田知家も自分の軍を放り出して頼朝に随行している。出世にはゴマ摺りが大切なのである。

中央軍が宇都宮に來た際に九年前の金砂山城攻めで最後まで抵抗してから行方を眩ませた佐竹秀義が、何事も無かったように「御無沙汰しました」と頼朝の前へ姿を現した。秀義は降参の印と源氏の証拠とを兼ねて「白旗」を持っていた。頼朝は「源氏の頭領である俺の旗と同じではいけない」と軍扇を秀義に与え、以後、佐竹の家紋が軍扇になったというのは知られた話である。頼朝が石岡まで出張して來た治承四年には、説得に応じて帰順した佐竹義政が大谷橋で斬られ（首塚だけが残り）時効期間中にノコノコと出てきた秀義が許される：兄弟で運不運が極端に違う―何とも不合理な気がするのだが、これは佐竹氏の先祖である新羅三郎義光の悪因縁に依るのかも知れない。

八月七日、源氏軍の主力は福島県伊達郡にある国見澤の駅付近まで到達した。宮城県境に近く、現在の東北自動車道・国見インターチェンジ辺りと推定される。其処から少し行った左側には高さ三〇〇mぐらいの山がある。何事も合理化される現代は「厚樫山」と表記されるが、鎌倉時代は文字を多くした「阿津賀志山」であった。源氏襲来を予測していた藤原泰衡は、異母兄の国衡を将として阿津賀志山に二万の精兵を配置し、そこで遠征軍の侵攻を阻止する計算であった。

通路を遮る山を利用した城が築かれ、土木工事

も施された堅固な城になったから、注文どおり敵がその山を越してくれば良いのだが、寄せ手は三十万に近い。当主の泰衡は、どういう計算なのか「鞭楯（むちだて）に本陣を置いていた」と伝えられている。鞭楯の場所が何処なのか：推定では仙台市宮城野区の榴が岡とされている。そこから阿津賀志城までは直線距離でも六十キロほどあるから、救援の役には立たない。他にも何か所か小規模な砦を置いていたらしいが、無駄である。

藤原秀衡の長男は国衡なのであるが、秀衡が家格を高める目的から鳥羽上皇近臣の陸奥守（藤原基成）の娘を正妻として貰い受け、生まれたのが泰衡である。岩手県史によれば、この陸奥守は平治の乱に関わって都に戻れず、秀衡が保護していたという。人物的には国衡のほうが上だったように思われる。兄弟の対立を案じた秀衡は互いに異心を抱かぬように起請文（神仏にかけた誓約）を書かせ、国衡には自分の若い後妻を与えたと言われるが、結局は大黒柱である泰衡が早々と誓約に背いて源義経を衣川館に襲ったのである。

当主が泰衡で無かったならば藤原三代の歴史が変わったかどうかは分からない：と言うより源頼朝の野望に関わる問題であるから何とも言えないが、狙われているところに金ピカと義経の亡命と武士団の思惑が絡んだのでは助かりようがない。奥州藤原氏の遠祖は平貞盛と共に平将門を討った藤原秀郷と伝えられる。秀郷流の藤原一族はどういう訳か運が良くない。将門を信奉する方には「平将門公の祟り」と言われそうな気がする。

さて阿津賀志山城に籠った奥州軍は山の下に幅広く堀を通じて阿武隈川の水を引き込み、其処に柵を設けて寄せ手を防ぐ作戦であった。そのため

重臣の金剛秀綱と息子の下須房太郎秀方が率いる数千人の兵を以て堀が守られ、山の周辺に軍勢が配備されていた。宮城県内の山形寄りにある荻田地方にも城郭を築き遠征軍を押さえるための無駄な布陣が出来ていたけれども、守備作戦の相互連携に欠け、指揮の一貫性に乏しかった。

攻める源氏側は八月上旬に諸隊が陸奥国入りして源頼朝は八月七日に国見澤の宿に陣を置いたのだが、その晩に激しい雷雨があり宿舎の近くにも落雷があった。「吾妻鏡」には「上下恐怖を成す」と記録されており、頼朝も腰を抜かしたので、將軍などと三十万の軍勢を連れ、勝手な理屈で遠征してきても只の爺さんと変わらないのである。

八月九日に両軍の戦いが開始された。国見澤に本陣を構えた頼朝は、上下水道が完備した敵陣の様子について報告を受けると、畠山重忠に命じて「工兵部隊」を編みさせた。堀を埋めたり阿津賀志山に攻撃用の登山道をつける任務である。護る方では苦勞をして造った堀であるから盛んに矢を射掛けて工事を妨害する。戦場と言うより、混乱した土木工事現場のような状況で合戦が始まり両軍に死傷者が出て激戦のうちに日が暮れた。

その夜のことである。阿津賀志山の城砦を取り巻くようにして陣を張る攻撃軍本隊の後方から闇に紛れて抜け出す七人の武士があった。三浦平六、義村、葛西三郎清重、工藤小次郎行光、工藤三郎祐光、狩野五郎親光、藤澤次郎清近、河村千鶴丸である。この時に畠山重忠は工兵部隊指揮のため最前線にいたから、その配下の武士が抜け駆けで敵陣に潜入しようとする七名を見つけて重忠に知らせた。「我ら畠山軍こそ、先陣の任を与えられているのに、その誉れを奪わんとする輩（やから）で

す。制止しましょう…」と言ったのだが重忠は悠然として「捨て置き…」と答えた。「…この畠山重忠が先陣を仰せつかつて以上、誰が手柄を立てようと、それも我が手の者と思えば良い。自分の手柄に拘って味方の攻撃を鈍らせてはならぬ！」と言って七人を見逃した。

そのお蔭で七人の武者は味方の前線を上手く駆け抜けて山城を北に走り敵の警備が手薄な裏山から登って山城の木戸口に到達した。奇襲攻撃と言っても敵に対して名乗りを上げて一騎討ちをするような真面目な戦闘であつたらしく狩野五郎が討ち死にした。それでも、その頃に総攻撃をかける本隊の攻撃時間と合致したので、本隊からも小山、宇都宮の軍が背後に回り、阿津賀志山を護る奥州軍にとっては予想しなかつた前後の挟撃を受けたような形になって打撃が大きかつた。激戦の結果、奥州軍は阿津賀志山城を放棄して退いた。

八月十二日、頼朝は戦った武將たちの勲功を査定した。今回の遠征における最大の殊勲者は先陣として土木工事までした畠山重忠であるが、重忠に見逃して貰い阿津賀志山の裏手に先駆けして敵を慌てさせた七人のデシヤバリ者も頼朝に認められた。七人のうち、最後に名を連ねる河村千鶴丸は十三歳の少年である。

討ち死にした狩野五郎以外の六名が頼朝の前に呼ばれて、それぞれの名乗りを上げ褒美を貰い、頼朝から労い（ねぎらい）の言葉をかけられた。武士としては言うことが無い荣誉である。その時に河村千鶴丸の名を聞いた頼朝が初めて聞く名なので父親の名を問うた。少年は俯いたまま「山城権守秀高の四男にござります」と小声で答えた。聞いた頼朝は一瞬、複雑な顔をしたが、直ぐに笑顔

になり側近の加賀美次郎長清に命じて千鶴丸を元服させ「河村四郎秀清」と名乗るように言った。手柄を立てた少年が父親の名を告げる際になぜ顔を伏せたかと言うと、これには込み入った事情が絡んでいたのである。

この河村千鶴丸の兄の河村義秀は、頼朝が石橋山で兵を挙げた際に全面に立ち塞がった討手の大将・大場景親に従い頼朝を苦しめた人物である。

景親が降伏した際に同行したのだが許されず治承四年四月二十六日に死刑が確定した。景親は既に首が無くなっている。ところが翌二十七日は頼朝が佐竹討伐に常陸国府へ向けて出発する日なので死刑が執行されなかつた。その俣、有耶無耶になり処刑は免れたものの牢獄に投じられていたのである。兄弟の母親は京極局（きょうごくつぼね）と言い頼朝に仕えていた。推察するに、この女性には北条氏の縁故で、政子夫人の庇護を受けていたのであろう。夫は早逝していたと思われる。

今回の奥州遠征に息子を参加させ家名回復を図りたい京極局は一計を案じ、武士たちで混雑する鎌倉営中に千鶴丸を呼び寄せておいた。譜代の家の若者ということで特に名を伏せて若い武士たちに近づけたのである。鎌倉営中に居た少年であるから、誰も罪人の家族とは気付かず自然に従軍が許されたような形で手柄を立てることが出来た。その上に頼朝が自ら「河村四郎秀清」と名乗るように命じたのであるから、本来なら罪人の家のままで終わるところを一举に出世したことになる。

京極局の立てた「家名再興計画」が成功したのだが、これだけのことを一女官の才覚で実現できるとは思えないから、政子夫人の協力があつたと見るべきで、その経緯が源頼朝の行動を伝える公

式の記録である「吾妻鏡」に堂々と明記されていることに驚く。吾妻鏡を編纂したのは北条氏の家臣らしい。したがって源頼朝のことを記録した内容も、大和朝廷が編纂した日本書紀や古事記のように「主人公」を神格化してはいない。近年は鎌倉幕府北条氏の記録であるが故に吾妻鏡の信憑性（しんぴようせい）が話題になるけれども八百年も過ぎた現代の政治家も平気で国民を騙すことを考えれば昔の嘘は幼稚で単純で分かり易い…。このエピソードでもう一つ特記すべきことは少年が「千鶴丸」と名乗ったことであらう。この名こそ囚人時代の頼朝と、藤原系伊豆の豪族・伊東祐親の娘・八重子との間に生まれ、僅か三歳にして伊豆山中を流れる松川の激流轟が淵に投じられた幼児の名である。其の辺りのことは、既にこのシリーズの第三章後編に書いたので省くとして、頼朝にとって「千鶴丸」という名は忘れられない筈である。尤も政子夫人の手前、頼朝も口には出せなかつたとは思ふが…京極局は、頼朝の弱点である名称を利用したのではなからうか…つまり、意図的に「千鶴丸」を名乗らせた？（証拠がないから「嘘つき」と言われても私は反論しない）千鶴丸と東北地方については幾つかの因縁が絡んだ話が伝わっており怪しい証拠もある。この章ではそのことを述べてゆきたいのだが、前提となる源頼朝の奥州支配を先に述べて置かないと話が進まないで、暫くはご辛抱を願いたい。

論功行賞を終えた頼朝は、ご機嫌で戦場を後にし、日没後には多賀城の国府に到着した。その際には海道軍の将である千葉常胤と八田知家が一族を連れて従い、多気、鹿島、真壁など常陸国の大掾一族も、付録で随行を許されている。

奥州軍にとつては「難攻不落」と勝手に決めていた阿津賀志山の簡単な敗北が、献金を禁じられた政治家のような痛手になった。雷に怯えたとは思えない勢いで進撃を開始した源頼朝の軍勢は怒涛のように陸奥へ攻め込み、八月二十二日には奥州藤原政権の首都とも言うべき平泉が攻撃軍の目前に広がっていたのである。阿津賀志山を守っていた国衡は奥州第一の名馬に跨り戦っていたが、和田義盛、畠山重忠ら合戦慣れた攻撃軍の武将に追われて防戦一方になり、討ち死にした。馬が深田に入つて動けなくなつたのである。

その馬(名馬)が言うには、主の国衡は肥満体で重かった。乗せる立場としては辛いが名馬の名に恥じず坂道を駆け上がった。それでも我慢して汗をかかないように努力していた。それなのに大将として何の策も用いず阿津賀志山に籠つて負け、敵の矢に追われて深田に追い込まれた。もう嫌だ！結局、愛馬に愛想を尽かされた国衡は討たれた。

総大将・泰衡のほうは、阿津賀志山の敗戦を知つて手際よく平泉に逃げ戻つたけれども、敵が目前に迫(せま)つていと知つて、自ら平泉に火を掛けた。焼かれたのは藤原一族の館だけでは無いから馬鹿な行為である。焼け残つた倉一つを源氏軍が開けてみたら、桃太郎が鬼が島で押収した宝より貴重な金銀工芸品などが出てきた。

敵に財宝が渡らないようにした後で泰衡は北の方に逃げ込み、其処から降伏を申し出てきたらしいが順序が逆である。許される筈もなく、追われて秋田県北部の比内地方まで逃げたようである。此処まで来れば安心と思つていたところ親切な家来がいて、頼朝に代わり首を取つてくれた。河田次郎という藤原泰衡の腹心の部下である。

この家来が頼朝の陣に「降伏します」とやって来て、風呂敷に包んだ主君の首を自慢そうに見せたのだが、頼朝のほうに役者は上である。首には目もくれず「…泰衡は何処へ逃げようと、既に我らの手中にあるも同じである。これを誅するに汝らの力は借りぬ。その方は主君の恩を忘れ、己の利を図つて泰衡を討つた。大逆なり」と一喝し、河田次郎も主君の泰衡と並んで首だけにされた。後白河法皇の説得を無視し勝手な大義名分を掲げて奥州へ攻め入つた源頼朝は、鎌倉を出てから四十余日で陸奥・出羽両国を占領した。ただし、広大な東北地方に君臨していた藤原氏を倒したのであるから残党も各地に潜んでいて「我こそは源義経である」とか「木曾義仲の子・朝日太郎が此処に居る」「藤原秀衡の遺児」などと称して反乱を起す者が絶えなかつた。源義経Ⅱジンギスカン説もその影響なのであろう。(続く)

《風の談話室》

このところ連日35度を超す猛暑日が続いているが、電力不足で停電するということもなく、なんとか間に合っている様である。

この現実を見ると、慌てて原発の再稼働を決めなくても大丈夫だったのではないかと思つてしまふ。

以前にこんな一行分詩を読んだことがあった。

『蟻んこよそんなに急いで何処へ行く』

急ぐことで一体どんな得があったのだろうか。

《ヨイシヨ広場》(陸平をヨイシヨする会)

動き出した時間

田島早苗

以前「沖繩スタディトラベル」に参加したメンバー有志を中心に新しい参加者を加えた十四人は「復興応援列車貸切車両と日本三景・松島『絆』でつなぐ三陸路3日間」という長いタイトルのツアーバスに便乗して、未だ震災の爪痕が残る三陸海岸地方を尋ねる事になった。取手・牛久・龍ヶ崎・石岡からの参加者八名を加え総勢二十二名、震災や津波の恐ろしさを再確認すると共に、悲しみを乗り越え、復興に向けて立ち上がった健気な人々との出会いを通じて生きる素晴らしさを学ぶ、小さな支援旅行の始まりだった。

津波ですべてが浚われ土台のみが残る屋敷跡をバスの中から眺めて通り過ぎる、延々と続く土台のみの更地を覆い隠すように夏草が生い茂り、そこは昔から空き地だったと錯覚を起こしてしまひそうだった。

津波疵隠し夏草生い茂る 早苗

気仙沼までの長い道のりを経て、最初の宿泊地気仙沼大島の休暇村まで船で運ばれながら、揺れる度に津波の瓦礫にぶち当たらないかと不安一杯だった。全くいい加減な私。宿は高台にあり津波を免れたが、宿のすぐ下まで津波が押し寄せたという。吉凶は正に紙一重を実感。

次の日、越前高田へ奇跡の一本松を見に行くことからスタディ開始。それは荒れ果てた海岸の防波堤跡らしき一角に唯一本枯れ色のまま立っていた。見学者も多く、ボランティアアらしい人の説明によれば、そこは松並木が続いていたが、すべて

津波に浚われ、唯一本だけ残ったこの松も助けることは出来なくて、やがて伐られる運命だという。すぐ近くに三階建ての中学校が残骸を曝している。その屋上の上まで海水に浸かってしまったとか。取り壊すにも予算が無く、一年と四ヶ月たってようやく工事が始まったという。ブルドーザーの音がやけに虚しく聞こえる。

基石海岸の絶景見学もそこそこ釜石へ。バスに乗り込んだ専門ガイドさんの案内で被災地を巡りながら説明を受ける。

大きな製鉄工場がある釜石は多くの家が、しっかりと骨組みだけを残し、ゴーストタウン化していた。(そう言えば同じような発言が命取りになった大臣もいた・・) ボランティアの女性は「早口でご免なさい、少しでも多くのことを伝えたくて」と、こみ上げてくる思いを噛み締めるように淡々と話す。

その、余りにも広範囲の被害の恐ろしさと、未だ手つかずの復興。ようやく始まった瓦礫の処理は、先ず分別作業から始めなくてはならず、少なくとも十年は掛るであろうとの話に声も出ない私達。その中で唯一の救いは、小中学校が並び立つ一帯の地域が、先生の機転と老人の一言で助かった話だった。

今迄も大きな津波に遭遇したことのあるこの地域では、定期的に避難訓練をしていたが、何時も低学年の子供が先頭だった。今回の大きな揺れに危機感を抱いた中学の先生が、「走れる者から逃げよ！」と叫び、足の速い中学生を先頭に、小中生が入り乱れて逃げ出し、家の後かたづけをしていた老人達も、必死で逃げる子供達の一団に気づき、すべてを投げ出して第一避難所目指して走り出し

た。ようやく全員が辿り着いた避難所の、奥に見える山が崩れていた。その時、一人の老人が「先生、俺ア是まで生きてきて、裏の山が崩れたことは一度もなかった」とぼつりと呟いた。その言葉を受けて、より高い第二避難所を目指して走り出した人達。ようやく辿り着いた時、遠くに異常な早さで駆け上がる津波の姿をとらえた先生の機転と老人の知恵を生かし危機一髪で難を逃れた人達を、通り掛かりのトラックがピストン輸送で安全なところまで運んでくれたという。「一人も犠牲者がなかった」という女性ボランティアの言葉に、思わず涙ぐんでいる人も多かった。

次の研修地三陸鉄道で三年後の復興を目指す島越駅の話しを聞き、完成の暁には少額の寄付金でも、モニメントにその名が刻まれると言われ、顔が赤らむ。隣の小本駅から宮古まで三陸鉄道のツアー専用貸し切り車両に乗り込み、車掌ガイドさんの解説を受ける。

災害のショックを乗り越え、少しでも前へ進まなければと四月一日からボランティアガイドを始めたというその女性は、こみ上げる感情に目を赤くしながら語る。地震の揺れから三十分後に第一波が襲ってきたが、すぐに引き始めた。皆は今まで何回も空振りに終わった津波警報を思い出し、今回もたいしたことはないと思いきもうとした。しかし五分後に第二波と第三波が入り混じり、異常な高さで速さで家も人も飲み込んで進み、為す術がなかったという。三十六億円という巨額な費用を掛けて作られた水門は停電のため全く役に立たなかった。

三陸鉄道の小本駅から宮古まではトンネルが多く、「せつかくの景観がまるで見えない」と不評を

かっていたが、トンネルのお蔭で鐵路が守られ、震災から僅か五日後には開通して通学や買い物など地域の足として大いに役立ったという。

行方不明者の帰りを一年待って、漸く葬儀というけじめをつけ、止まったままだった時計の螺子を巻き、前を向いて歩こうとしている被災者、間もなく新盆がやってくるので、それまでに少しでも何とかせねば・・」と言う言葉が重い。党利党略私利私欲に明け暮れている政治家達よ、この現状を理解していますか？

ふるさと「風」6周年

市川紀行

6年、月刊重ねて74号。この質と量にして驚くべき継続である。あふれる見識と銜いのない矜持、通俗と没個性への反抗、のさばる「歴史の大ふるさと石岡」意識への鋭い洞察等々会員関係者の筆力と説得力に毎回感銘し精神の高揚を与えてもらっている。ことばがあふれるとはこういうことでもある。 「神様」の小林秀雄、先日逝ってしまった「言語にとつて美とは何か」の詩人吉本隆明、邪馬台国「九州王朝説」の古田武彦(打田さんがふれていたなどの文章も精神を奮い立たせる魅力にとんでいたが、同様のことばの言語をもって「風」はわたしたちに近づいてくる。地域にあって、いや地域なればこそその「固有時」だ。地域の真実の固有時は普遍性を持つと知らねばならない。のさばりしがみつく、そしてだれも動かない「歴史の大ふるさと」よばわりなどいまや何処にでもあり、そんな没個性はなにかを発信する普遍性を決して持ちえないのだ。市民の方々もいつかは気づくだ

ろう、ほんものが存在していることを。石岡の一角に、そして八郷のギター文化館のドームの舞台に。畏友太田尚一さんの「常総の歴史」刊行続行とともに。さあれ「石岡」に光あれである。もつとも「風」も太田氏ももう視線ははるかにあつてそんなことはどうということもないといえは言はずぎだろわか。(親しき石岡の方々よ友どちよ)失礼を許したもれ。小林さんはじめ女性メンバーの優しげなレポートもほつとする独特の色合いを「風」に与えている。実践者のものだからだろわか。「風たちぬ、いざ生きめやも」も「風立ち騒ぐ霞浦の湖賊」も風はいつも前を指し辺りを払い通俗と権威への反抗をまとつていふ。ふるさと「風」6周年にエールを送り、時としてすさぶる朔風を楽しみたいと願つていふ。

さて今回の朗読舞公演は見事であつた。舞も言葉も音楽も魅せられる感覚でひきこまれた。朗読舞の新境地を開いた。と言うより朗読手話舞は「ことば座」の世界的初の独創であるから朗読舞を新たな芸術ジャンルとして確立したというほうが正しい。なんとという挑戦の結実だろわか。あえていえば(比較することではないが)オペラの大舞台にはありえない、そして負けない凝縮された物語の心の表出があつた。ギター文化館の小さな空間にあつたのだ。マカオ公演は延期されたが東京公演の企画が進められるという。さらに進化ヴァージョンアップした朗読舞公演を待ちたいと思う。媚びない芸術創造の在処と地域の誇りを寄りかかり文化をまきちらす中央に思い知らせたい。自立は自ら立つこと自ら起き上がること、ああ思ひは遙かに遠い。

白井氏のすばらしいそしてイメージにとんだ脚本演出によって、小林幸枝さんの舞の大変貌ぶりが

に感動した。深い表現と豊かさ強さの舞に酔つた。あとで思ったのだが舞に没入する小林さんは役が自分か自分が役か分からなかつたに違ひない。それくらい美しいパフォーマンスであつた。柏木久美子さんの抑えた舞も見事だつた。女史とは長いつきあいだからほぼすべて理解が及ぶが、舞台をどうつくるかを熟知している。白井氏の困難な詩の連続転回にもしなやかに違和を与えることなく舞の表情をつくつていた。さすがである。前面に小林さんの情熱の激しい手話舞が展開するとき、後方で柏木さんの秘めたる舞が離れては重なる。その立体のコントラストをつくつたのは柏木の才能である。白井脚本への愛着と理解の深さを示している。今もあざやかによみがえるシーンである。私ごとに関するので恐縮であるが御礼をこめて

若干記したい。拙詩「ついに太陽をとらえた」を白井氏は全編この上ない音調で朗読してくれた。しかも本公演の直前の30分の長さ、連続3日である。たしかに喉を痛めたに違ひない。しかし本番の語りのすばしさはどうだ。朗々と颯々とひしひしとピアノを震わせふたりの舞姫をいざなつた。演出家は精神的には勿論肉体的にも最後は強ければならない証である。原発崩壊と関係の亡者どもの悪業、そして大震災に鬱屈しながら久しぶりに書いたものである。これは声に出したほうがいいと自らに言い聞かせ、書いては声にし声にしては書いた。その状況は私しか知らないが、以心伝心60年安保以降の空気を吸つた世代、白井氏は公演で読みたいと言つてくれたのである。拙い詩作品にとつてこの上ない僥倖であつた。また私の意図が生かされた。やむなくカットする部分はお任せしたが結果は全編朗読であつた。打ち明け話に

よると「久美ちゃん」(柏木さん)がカットなしと告げたそうである。よき女性はまた強き女性である。「ついに太陽をとらえた」は物理学的原子の世界であるが、「原始、女性は太陽であつた」とことばを重ねて拍手したい。それを受けた「ヒロ爺」の意地にも勿論である。因みに私も村長現役時代、柏木さんの「ヒロシマ」をテーマにした創作舞踊に出て群像の主役を舞つたことがある。しかも東京厚生年金会館大ホールであつた。「非核平和宣言自治体」の旗手として出演するべきという言葉は確かに説得力があつた。(私の演技は好評だつたと褒めるのも忘れなかつたが)この詩を書いて半年以上経つていたので白井氏の声を客観的に味わうことが出来た。詩作の出来不出来は別にして改めて感謝する次第である。

白井氏と私の、そして「風」と「美浦」との接点交流について白井氏はいくたびか触れられてきた。うれしくも大学の先輩、八郷に住む「スワラジ学園」主宰の合田寅彦氏が取り持つて下さり、白井氏が初めて美浦での私の演劇公演に顔を出してくれたのだつた。そして美浦村民の活き活きた愉快な様子、スタッフや観客の誇りに満ちた姿を「風」に書いてくれたのだつた。実は私が白井氏に手紙を書くきっかけとなつたこの「風」を美浦や「宙の会」に赤線を引いて送つてくれたのは小美玉(小川町)の女性市民活動家である。素敵な方で「風」の隠れた読者でもあつた。これ以降、「風」や「ことば座」と「陸平をよいしよる会」の交流が始まり、小林さん柏木さんの共演が始まり、「縄文の森コンサート」の朗読舞が実現し、今回の美浦の昔物語を原型とするすばらしい芸術創造が生み出された。まこと白井氏の言うように「緑

は異なるもの、人と人との出会いはうれしくおもしろいものである。偶然といおうか必然といおうか。合田氏夫妻や小美玉婦人に感謝しきれるものではない。

先輩のノンフィクション作家が書いた小説「融雪期」を合田氏を通して読んでくれたと白井氏の文にある。小生らしきモデルも登場する学生演劇公演を背景にした長編である。私たちが2、3歳上だがほぼ同世代のため安楽、ベトナム戦争という状況は共有している。私たちは札幌だが白井氏は首都の大学だから学生演劇環境ももっと濃密であったろう。一気に懐かしく呼んでくれたという。確かに言葉はどうでも懐かしい青春時代ではあった。だから「太陽をとらえた」に書いたベトナム反戦歌手、ジョン・バエズの「ドナドナ」も今では懐かしいひびきである。二次大戦以前の原詩については知らなかった。私の札幌英会話教室の友人で千歳米軍基地の黒人GIは優しいまじめな英会話講師であったが、突然ベトナムに持っていかれた。彼は「殺さないよ」と悲しそうに言って去った。消息は消えたままになった。「ドナドナ」は白井氏の指摘するそんな思い出やイメージを呼び起こす。詩では原発放射能との対比でもつとやさしい情景にしておいたけれど。「融雪期」をよんで思い出したというもうひとつのエピソードが書かれている。「ランボーなんてもう陳腐。今はジャン・ジュネよ」という「チェリーブランデー」の女である。あのころ確かにジュネをランボーの後継者の存在に祭り上げる論調が持ち込まれ、お先棒を担いだ批評家たちが実存主義的衣裳を着せて発表したものだ。ジュネはランボーの一句さえ知らないのだ。ランボーの詩法と行動は未だ誰も乗

り越えられず謎と神秘の中にある。ジュネなどいわば「時代風俗」だからポルノとエイズ的現実に凌駕されいまや誰が読んでいるか。私はその女性を責めているのではない。むしろ白井氏と同じように懐かしくほほえましいのだ。はやりの思潮をつまんで話題に出来るのはヴィトンやグッチのバッグをぶら下げるより格好もいし艶めかしいからである。私もチェリー酒の二杯ぐらいは奢っただろう。それ以上は女の夢がはがれるからごめんだけれど。「斜めにかぶったベレー帽」がなんともきいていてほんとにそうだったとほろ苦さも重なってくる。シャンソン「暗い日曜日」が妙に似合ったりして。ともかくも私たちも「少し」は年をとってしまった。

「風」6周年と朗読舞公演成功のお祝いが白井氏の「ことば座だより」に乗せられて横道に随分それてしまった。皆様にお許し願いつつ、一層の展開を心から期待するものである。

暑さの中、こころ若ければ肉体も若くあり得ると勝手に思う昨今である。されば「夏と澄んだまなざしが混じる」。

《ことば座だより》

再出発

小林幸枝

連日35度を超す猛暑。皆様、体調はお変わりありませんか。

8月にはマカオ公演が計画されていましたが、6月公演の直後に残念ながら中止となり、ちよつと気の抜けた感じに居りましたが、梅雨明けと同

時に連日の猛暑で、気が抜けたなんて言っておられなくなりました。ドラツとしているとすぐに熱中症になりそうであわてて緊張を取り戻し、少し熱さにも慣れてきました。

白井先生は、マカオ公演が中止と決まると直ぐに来年の東京公演に向けての企画打ち合わせを進めておられて、後輩の人や音楽関係者の方たちと会っておられます。私も、課題になっている舞の硬さを直すために、汗だくになって稽古に励んでおります。これだけ汗をかいたら少しは体がスリムになるかと思っておりますが、汗をかいた分、水分の補給が必要となるので、スリムになる気配は見えてきません。

12月の公演は、まだ確定ではありませんが、柏木さんとの舞の競演となるようです。柏木さんは、ミチオナンバーと網谷さんという方の詩を舞、私は新しい詩を朗読に手話舞することとなるそうです。柏木さんとは、それぞれ独立した詩を朗読に舞うこととなりますので、共演ではなく競演ですと白井先生には言われています。

東京公演は、まだ企画検討の段階ですが、これまでの舞台とは全く違うそうですので、私の手話舞も再出発の形で、よりスケールアップさせたいと思っております。

視線は東京公演へ

白井啓治

先日、母の三回忌の墓参りのついでに、十数年ぶりに後輩に会ってきた。用があったのは後輩自身ではなく、クラリネット奏者であるご主人であった。

六月公演では、ホルストが伊藤道郎のために作曲した「日本組曲」をモチーフに、美浦村に伝わる将門伝説を舞劇にしたのであったが、これを更にバージョンアップした形で、ギター文化館でのアトリエ公演的舞台ではなく本格的なオーケストラをバックにして、舞踏劇「新説日本組曲」の公演を考えての事であった。

具体的な開始にはまだ色々と企画を練らなければならぬのであるが、企画の始まりとしては非常に面白いものがあつた。

八月には再度出かけて行き、もう少し具体的な企画検討会を行おうと思つてゐる。

小生としては、この企画が実現すれば、それが最後かなと思つてゐるのであるが、弟子の曰く、○さんは七十七歳、××さんは八十歳、△△さんは八十数歳。白井さんはそれに比べればまだまだ青年。頑張つてくれなくちゃあ、と言われてしまつた。それで、その気になつて、もう少し暴れてみるかと新たな情熱に火をつけてみたが、果たしてどうなるであらうか。

今月のヨイシヨ広場では、市川様より嬉しいお話を頂いた。こうした形で、色々な方からの投稿が頂けたらと願つてゐます。編集事務局では風の談話室枠は無量大(?)を寛悟してゐます。

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ギター文化館 2012 CONCERT SERIES

オカリナ奏者野口喜広と脚本家白井啓治の

第3回 里山と風の声コンサート

9月9日(日曜日)開演 PM3:00(開場 PM2:30)

常世の国へふらりと迷い込み、雑木林と風に語りかけるしか術を持たぬ瘦男

白井啓治と常世の海と里山に魅せられ、大地に母の詩を土笛(オカリナ)に声する

野口喜広と矢野恵子の三人が出会い一緒に風に声することになった。

第一部 朗読とピアノによる《風の言葉》

朗読=白井啓治 ピアノ=山本光 「言葉とは心の流れ。

風の流れにも 水の流れにも 優しいうたがある。」

第二部 野口喜広ニューアルバム(土笛の里…めぐる生命)リリース記念コンサート

オカリナ=野口喜広 歌=矢野恵子 オカリナ伴奏=スタンダード工房の仲間達

コンサート料金 3500円 事前購入の場合は3000円 小・中学生券2000円

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35

Tel 0299-46-2457 fax 0299-46-2628